様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０７６４

研究課題名（和文）写真資料の分析を通してみた植民地朝鮮における考古学的調査の再検討

研究課題名（英文）Reexamination of the Archaeological researches in Colonial Korea on the analysis of the photographs

研究代表者
吉井　秀夫（YOSHII, HIDEO）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：９０２５２４１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,300,000円、（間接経費）　990,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、植民地時代に日本人研究者が朝鮮半島で撮影した古蹟関係写真を集成し、その歴史的意義を明らかにすることを目的にした。その結果、朝鮮古蹟調査事業において、写真撮影者がどのような役割を果たしたのかを明らかにした。また、焼付写真のサイズと、同じ被写体を撮影した写真の比較検討を通して、写真の撮影者と撮影時期が推定できることを示した。さらに金冠塚に関係する写真の検討をおこない、古墳の発見から報告書刊行にいたるまでの経緯を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study program aimed to gather and analyze the photographs of Korean heritage in Colonial Era for examining the historical significance of them, and I got the following results. (1) I revealed that the photographers had the important role in the excavation and research of Korean ancient heritage in colonial Korea. (2) I was able to guess who and when took the photographs of Korean ancient heritage by analyzing these size and comparing some photographs taken by several times. (3) As the result of the examining the photographs of Kumgwang-Chong mounded tomb taken from 1920 to 1924, I revealed that the process of researching the articles found from this tomb for publishing the excavation report.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：考古学　朝鮮史　写真

１．研究開始当初の背景

植民地朝鮮における考古学研究において、写真は、フィールドワークの記録手段として大きな役割を果たした。また『朝鮮古蹟図譜』に代表されるように、当時の写真は現在の朝鮮半島における考古学研究にとっても貴重な資料である。その一方で、写真のもつ象徴性に注目し、これらの写真が朝鮮総督府の文化政策の宣伝に利用された、との批判もある。しかし、これまでの研究の最大の問題点は、そうした写真が、いつ・どこで・誰によって・どのような目的で撮影されたのか、という基礎的な情報を十分に解明しないままに、さまざまな分析が行われてきたことである。こうした問題を解決するためには、当時撮影された写真、およびそれに関わるさまざまな情報を集成すると共に、写真からどのようにして、どのような情報を引き出すことができるのかについて基礎的な検討が必要であると考えられた。

２．研究の目的

上記のような現状認識に基づき、本研究では、植民地時代に日本人研究者が朝鮮半島で撮影した古蹟関係写真を集成し、その歴史的な意義を明らかにすることを目的とした。具体的には、朝鮮古蹟調査事業に関わる写真資料を幅広く集成し、関連資料の参照や、同じ対象物を撮影した写真を比較検討することにより、写真がいつ・どこで・どのような目的で撮影したかを明らかにすることを目指した。さらに、当時の植民地社会において、写真がどのように利用されたのかを検討することを通して、植民地朝鮮における考古学調査において写真が果たした役割を、批判的に再検討することを目標とした。

３．研究の方法

（１）朝鮮古蹟調査関連報告書に掲載された写真の集成および検討

朝鮮古蹟調査に関連する報告書には、図版目次や写真のキャプションなどに、撮影者名が記載されている場合が少なくない。また、本文中に撮影者についての記述がなされている場合もある。報告書に示されている写真を、その撮影者に関する情報とリンクさせながら集成作業をおこない、どのような人物が古蹟関連写真を撮影したのか、通時的に検討をおこなう。

（２）京都大学考古学研究室所蔵朝鮮古蹟調査関連写真の整理

京都大学考古学研究室には、朝鮮古蹟調査事業に関連する写真および関連資料が所蔵されている。それらの資料の整理をおこない、大韓民国立中央博物館所蔵ガラス乾板目録や、東洋文庫の梅原考古資料に含まれる写真資料との比較検討を通して、写真がいつ・誰が・どのような目的で撮影したものであるかを検討する。今回は、1918 年に濱田耕作・梅原末治が慶州を訪問した時に入手した写真と、1921 年に発見された金冠塚に関連する写真の整理をおこなった。

（３）慶州古蹟関連写真の検討

慶州の古蹟に関する写真は、朝鮮総督府古蹟調査関連の調査に伴い撮影されたものよりも、むしろ、絵葉書や観光ガイドに掲載されたものの方が多い。これらの写真を集成し、同じ対象物を撮影した写真同士の比較検討や、絵葉書の型式学的検討を通して、各写真の撮影時期を検討する。また、写真が掲載された慶州関連の出版物を集成し、その刊行状況の変遷を検討することにより、慶州古蹟を撮影した写真のもつ歴史的意味を検討する。

４　研究成果

（１）朝鮮古蹟調査関連報告書に掲載された写真の集成および検討

朝鮮古蹟調査事業が開始された 1910 年代においては、関野貞と共に、谷井済一や澤俊一が、写真撮影に大きな役割を果たした。谷井は、1914 年には関野のかわりに調査を主導し、1916 年には朝鮮総督府博物館の事務嘱託となった。さらに 1917 年には古蹟調査委員となり、1921 年に職を辞するまで、朝鮮古蹟調査事業において、現地の実質的な責任者となった。また澤は、1916 年に博物館の嘱託となり、敗戦を迎えるまで古蹟調査事業に関わり続けた。彼らは、多くの調査に同行し経験を積む中で、写真撮影以外の役割を果たすようになったのである。

1920 年代以降は、発掘調査の担当者が現場の写真を撮影することが多くなった。このことは、日本内地において考古学的研究に関わる人々の間で、自ら現場の状況を写真で撮影する技術が習得されていったことを示している。しかし、澤をはじめとする写真技師は、遺物の写真撮影においてその能力を発揮した。その背景には、朝鮮総督府としての発掘調査が困難になる一方で、各地で横行した古墳の盗掘により出土した遺物を入手した人々の収蔵品を撮影・記録することが、当時の研究の進展上、必要不可欠であった、という事情もあった。

また、各地で写真館を経営する技師たちが、写真撮影・現像などに少なからずの役割を果たしたことを明らかにした。まず、朝鮮古蹟調査事業の初期においては、ソウルにおける代表的な写真館である村上写真館が、撮影・現像・焼付に関わっていたことを指摘した。また、慶州・東洋軒写真館は、朝鮮総督府博物館慶州分館のすぐ横に店を構えており、慶州での古蹟調査の現場や遺物の撮影・現像・焼付の業務をおこなっていた。そうした調査とは別に、東洋軒写真館では慶州古蹟の写真撮影を続けており、その写真は、写真集・絵葉書・観光ガイド・論文などさまざまな印刷物にしばしば用いられた。

（２）京都大学考古学研究室所蔵朝鮮古蹟調査関連写真の整理

1918 年に濱田耕作・梅原末治がはじめて朝鮮古蹟調査事業に参加した時に京都大学にもたらされた写真 110 枚を検討した結果、印画紙および写真面のサイズの違い・撮影技術・絵葉書などへの転用の有無を基準として、濱田・梅原が撮影した写真と、東洋軒写真館から購入した写真からなることを明らかにした。前者の写真は、1918 年の慶州の様子を示す資料として用いることができる。例えば、1918 年段階における、仏国寺の解体修理の進行状況や、解体修理後の石窟庵の仏像の状況をうかがい知ることができる。後者の写真は、1918 年以前の慶州の様子を示す資料であり、解体修理など、慶州古蹟の「観光化」が進む以前の様子が撮影されている点が重要である。また、これらの写真を基準として、同じ写真が転用された絵葉書印刷時期の１点を、1918 年に押さえることができることを指摘した。

1921 年に発見され、濱田・梅原が中心となって報告書の作成がおこなわれた金冠塚関連写真は、検討の結果、①金冠塚および周辺の古墳を撮影した写真、②金冠塚発見直後に出土遺物を撮影した写真、③遺物の整理過程で撮影された写真、に区分されることが明らかになった。このうち①と②の写真は、印画紙および写真面のサイズが同じであり、同一のカメラ（そして恐らくは同一の撮影者）によって撮影された可能性が高いと考えた。また、③に含まれる写真のサイズはほぼ揃っているが、重要な遺物の撮影には大判ガラス乾板が用いられている。そして、これらの写真を、国立中央博物館所蔵ガラス乾板目録や、東洋文庫の梅原考古資料所蔵写真と比較検討することにより、写真を撮影してから報告書図版を編集するまでの具体的な過程を復元することができた。

（３）慶州古蹟関連写真の検討

慶州の古蹟を撮影した写真を、朝鮮古蹟調査事業関連の写真だけではなく、慶州関連書籍や絵葉書、観光パンフレットに用いられた写真まで含めて集成し、比較検討をおこなった。その結果、絵葉書や慶州関連書籍に用いられた写真の多くは、1910 年代以降に東洋軒写真館によって撮影されたものであることが推定された。また、これらの写真の撮影順序を検討することにより、写真に写された情報を通して、慶州の古蹟が整備されていく状況が復元されることを示すことができた。

さらに、慶州の古蹟に関する印刷物の刊行状況を整理した結果、以下のような見通し得ることができた。まず 1910 年代は、日本人による慶州古蹟に対する概説が執筆されると共に、それらの古蹟地を観光地として活用するための印刷物が観光されはじめる時期であった。中でも、東洋軒写真館が撮影した写真は、既にこの時期に写真集・絵葉書を製作・販売するために用いられていた。1920 年代に入ると、慶州古蹟保存会が財団化され、朝鮮総督府博物館慶州分館が開館されることを契機として、『新羅旧都慶州古蹟図彙』・『新羅旧都慶州古蹟案内』・『慶州古蹟案内』などの本格的な写真集・観光ガイド・観光用地図が製作されはじめた。こうした観光用の刊行物は、1930 年代に入っても、増訂されながら版を重ねた。また、慶州古蹟保存会以外の業者により、さまざまな写真集・絵葉書・観光地図が作製・販売された。このような印刷物の刊行状況の変化は、慶州の観光地化と、それをめぐる社会状況の変化を反映しているものと思われる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２　件）

① 吉井秀夫、「朝鮮古蹟調査事業と「日本」考古学」『考古学研究』第 60 巻第３号、査読有、2013 年、pp.17－27

② 吉井秀夫、「京都大学考古学研究室所蔵金冠塚関連資料とその性格」『新羅古墳精密測量及び分布調査研究報告書』、査読無、国立慶州文化財研究所・慶州市、2011 年、pp.110-125

〔学会発表〕（計 10 件）

① 吉井秀夫、「写真を通してみた慶州における古蹟の保存と『活用』」、朝鮮史研究会関西部会２月例会、2014 年 2 月 22 日、河合塾大阪校

② 吉井秀夫、「絵はがきから見た慶州の朝鮮古蹟調査事業」、朝鮮古代研究会、2013 年 11 月 1 日、ハートピア京都

③ 吉井秀夫、「朝鮮古蹟調査事業と「日本」考古学」、『遺跡・遺産・考古学－調査研究／マネジメントの検証－』（考古学研究会第 59 回総会・研究集会）、2013 年 4 月 21 日、岡山大学

④ 吉井秀夫、「慶州の古蹟写真研究における絵ハガキの史的情報－仏国寺・石窟庵の場合を中心に－」、シンポジウム「近代アジアをめぐる絵ハガキメディア－帝国・表象・ネットワーク－」、2012 年 11 月 11 日、国際日本文化研究センター

⑤ 吉井秀夫、「東洋軒写真館と慶州の絵ハガキ」、近代アジアをめぐる「絵ハガキ研究会」2012 年度　第２回研究会、2012 年 6 月 30 日、国際日本文化研究センター

⑥ 吉井秀夫、「鳥居龍蔵慶尚道調査の足跡をたどる－鳥居龍蔵記念博物館所蔵資料の検討を中心に－」、朝鮮古代研究会、2012 年 6 月 29 日、ハートピア京都

⑦ 吉井秀夫、「京都大学考古学研究室所蔵金冠塚関連資料の整理とその成果」、東アジア考古学会、2011 年 6 月 26 日、福岡大学

⑧ Yoshii Hideo, 'Re-examination of archaeological research artivities in Colonial Korea -focusing on the investigation of Kumgwan-chong tomb' "5th World Conference of the SEAA": 6-10 June 20126.8, Fukuoka,
⑨ 吉井秀夫、「鳥居龍蔵の朝鮮半島調査－鳥居龍蔵記念博物館所蔵資料の検討を中心に－」、シンポジウム「鳥居龍蔵の足跡を考える－台湾・中国・朝鮮半島－」、2012年3月4日、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館
⑩ 吉井秀夫、「朝鮮総督府古蹟調査と「日本」考古学の形成－京都帝国大学考古学研究室の場合－」、国際日本文化研究センター・東北亜歴史財団国際シンポジウム「日韓相互認識－移動と視線 1910－2010」、2010年12月18日、国際日本文化研究センター

〔図書〕（計１件）
①吉井秀夫、『写真資料の分析を通してみた植民地朝鮮における考古学的調査の再検討』（平成22年度～平成25年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書）、2014年、pp.1-106
〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
植民地朝鮮における考古学的調査を考える
http://hb3.seikyou.ne.jp/home/Hideo.Yoshii/colonial/colonialtop.html

６．研究組織
(1)研究代表者
吉井　秀夫（YOSHII, Hideo）
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：９０２５２４１０

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：